
アンノーン-unknown-

獅雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノーン - unknown -

【Nコード】

N6202Z

【作者名】

獅雨

【あらすじ】

突如あるサイトに書き込まれた人類危機の予言。それから8年後のクリスマス、ネット上で1000万人の友人を持つ大学生、神谷祀裏は通り魔の脅威に脅かされていた。その正体を知った祀裏は驚愕の事実を知る。テロ、ウイルス、黒組織。ネットを駆使した非科学的で非現実的な世界が平行線と境界線の狭間に今、垣間見え始めた。

0001・X・mas(前書き)

最初の説明が少し長いので、飛ばして読んでいただいても結構です。

『【Unknown】これが最終警告だ。人類はある脅威に脅かされている。状況はあまり・・・否かなり夕チが悪い。特にこの約2年間は注意せよ。2035年12月～2037年1月。繰り返し、2035年12月～2037年1月。決して忘れるな。このメッセージは1週間後の2025年12月24日に自動消滅する。出所は調べても無駄だ、既に手筈てははついている。以上だ。』

この文面は一部ネット上で凄まじい話題を呼んだ。内容も勿論だが、記述通りに物事が進んだ事がその原因である。2035年からの2年間については不明だが、このアンユーザーの出所は検索が不可能となっており、きっかり1週間後のクリスマススイブにメッセージは管理人の手を使わずして削除された。その後文献の搜索は続けられたが、完璧なる出所詳細の抹消抹消により捜査は中断された。

? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ?

2033 . 12 . 24 . Sat 20 : 38 : 19

世はクリスマス一色というのに、自分は大学生ながらバイトに明け暮れている。レジの横で税込み105円の品をドライヤーみたいな機械にかざすのが僕のクリスマス。

僕が子供の頃と何も変わらない世界。急激な発展を手にした日本はその衰えが始まるのも急激的なものだった。20年前からこの日本は・・・日本だけじゃない、世界は止まってしまっている。テレポーターもタイムマシンも空飛ぶ車も猫型ロボットも、何一つこの世界には存在しない。進むのはネットの世界だけだ。2010年頃から注目されているソーシャルメディアサービス。世界の誰とでも話せたり遊べたりできるといふ美点を認められ、今も人類を一つの大きな家族にするため大きな注目と脚光を浴びている。

さえないクリスマスをもた僕もこのソーシャルメディアとともに過ごしているのだ。

pipipipipipipipii!!!!!!!!!!!!!!

ケータイの音だ。僕の友人が、僕を求めている音。僕を必要とする音。僕を呼んでいる音。

「おい、仕事中はケータイの使用はだめだろ。社会の常識だぞ」

「すいません先輩。友達がうるさくて」

「ほどほどにしとけよ」

8年前、あのメッセージが現れてからというものの携帯電話、パソコンの普及率は爆発的に上がったそうだ。たった一つの文を求めて、たくさん人間が何かに取り憑かれたように。というのはいくらなんでも大袈裟かもしれないが、それぐらいの社会現象へとなった。それと同時にメッセージが公表されたソーシャルメディアサイトの人気も爆発。炎上どころの話ではなかったようだ。そしてその人々の一人として挙げられるのは紛れもない、僕だ。

このメッセージに興味を持った人間は数少なくなかった。単なる厨二病患者が書き込んだ馬鹿げた文章で終わるはずだったが、政府警察、専門家が全力で搜索した出所、身元が見つからない事を引き金に全世界の話題へと変貌していったのだ。僕はその事件と関連のある事件との相互関係を必死に追跡した。あのころの幼い僕は12歳でありとあらゆるサイトに手を出し、この事件に関する情報を集めた。広めた。見た。感じた。考えた。そして。

「その結果がこのざまだよ……」

「なんか言ったか？」

「なんでもないっすよ」

「あっそ」

ケータイの画面上には一つのアプリが開かれていた。友人帳というアプリだ。ネット上で知り合った人々の数を自動でカウントしてくれるアプリだ。出ている数字は【10007024名】。これは一体どういう冗談なんだ……。

? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ?

2033 . 12 . 25 . Sun 2 : 46 : 28

日にちも変わり夜も深まった頃、バイトの時間は終了し先輩と別れ自宅へ向かう。

2033 . 12 . 25 . Sun 3 : 07 : 11

自宅へ着いたのはバイトが終わりちょうど30分程度の時間だった。帰り際もらった店長の差し入れ（カップ麺）のビニールをピリピリと剥がし、お湯を沸かした。沸騰するまで時間があるのでネットを開く。寝る事が嫌いな人間というのは僕のような人なのだろうか。今日も特に愛用しているサイトを開き、友人を探る。

「だれかいるだろうか」
カチッ

『【アンドリユー】クリスマススイブはどうだったの（．．？）』

『【@E】傷に塩をまぶすな』

『【アンドリユー】まぶしちゃうのかよ』

相変わらず馬鹿な会話だ。寒い外から帰ってきた僕にはぴったりな心温まる会話だ。

『【Alfred】さんがログインしました。』

『【Alfred】こん。湿気た会話してんな今日も』

『【@E】アルフ。最近見えないからどっか行っちまったんじゃないかって』

『【Alfred】ああ、ここんとこシフトが入ってな』

ここで紹介しておこう。アンドリユーの本名は伊師神いしがみ 紅樹こうじゆ。中学からの幼なじみだ。当時ネットの影響で気がおかしくなっていた僕を構成させてくれた唯一の恩人だ。

そして@Eはネット上で知り合った人物で、口が少々悪いが女だ。そして生粋のバカだ。

走用の車に乗り込み逃げていくのには目もくねず、目もよこせず、
その場で座り込んでいただけだった。

2025.12.17.Wed 21:00:00

母は目を閉じ、命を失った。そういえばちょうどネット上である
人類危機のメッセージが書き込まれた時刻だ。

0002・余興(前書き)

『でかこまれている会話はネット上のもの。
「でかこまれているのは通常の会話です。」

2033 . 12 . 25 . Sun 13 : 20 : 55

pipipipipipipipii!!!!!!

携帯の音だ。僕の友人たちが僕のサイト、ブログに書き込んでくると携帯が鳴るように設定されている。そのおかげでこのまま一日中寝てしまいそうだった自分を起こしてくれた。携帯を開く。特に重要なメッセージはなさそうだ。フライパンを出し、卵2個とベークンを数枚をその上に広げ、焼いていく。大学生の一人暮らしとして自炊は当然である。まあ至って簡単なものばかりだが。

2033 . 12 . 25 . Sun 16 : 49 : 23

pipipipipipipipii!!!!!!

またメッセージが届いた。しかしその内容は友人からのものではなかった。

『【Unknown】君は、かみたに神谷 まつり祀裏で間違いないか』

「あ……アンnoonユーザー!!!!!!!!!!!!」

いやしかしどうせ成りすまisdarou。アンnoonと名乗れば誰でもなりきることができるのだから。紅樹の悪戯いたすらか？

『【Alfred】さんがログインしました。』

『【Alfred】なんだアンドリユー。冗談が下手になったんじゃないのか?』

pipipipipipipipii!!!!!!

『【Unknown】質問に答える。君は神谷 祀裏で間違いないか』

なんだ、しぶといな。今日は意地でもノつてもらいたいらしい。

『【Alfred】まだやるか。わかったよ。はいはい僕は神谷祀裏で間違いありませんが何か?』

pipipipipipipipii!!!!!!

このメッセージを送ってからというものの返事はなかった。アンドリューや@Eにも確認したが二人ともアンnoonユーザーが送ってきた文面に見覚えはないらしい。やはりあのアンnoonユーザーは本物だったのだろうか。

2033・12・31・Sat 8:00:59

今年最後の朝はあまり目覚めがよくなかった。今日は紅樹ともう一人、幼稚園からの幼なじみの赤羽あかはね 宮瑠美くろみに除夜の鐘を聞きに行こうと誘われていたのだ。しかし集合が午前11時とはこちらもやはりバカなのだろうか。ひとまず食パンを焼き、コーンスープの素にお湯を注ぐと僕は腹いっぱいになっていた。

?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?・-?

2033・12・31・Sat 11:05:27

「ゴメンゴメン、遅れちゃった」

「計画者が遅刻とはとんだご身分ですな」

「だからゴメンって言ってるでしょ、もう」

「そのへんにしとけて」

本当にこの二人は仲がいいのか悪いのかわからない。まあ小学生から同じで仲が悪いというのもおかしい話だが。

「んで? 計画者さん。今日はどこに行くんだ?」

「え? 除夜の鐘聞きに行くって言わなかったっけ?」

「いやそれはわかってる。夜までどこで時間を潰すのかって言うんだよ」

「.....いや特に」

「ノープランかよ!!!」

バカ仲間として@Eを紹介したいわ。二人の会話を聞いてみたいよホントに。にしてもなぜ集合場所が大学なんだ? なにかのフラグか?

「あ!!! 祀裏先輩!!!」

報告：フラグは回収されました。

「またお前か、何の用だ？」

「ん？誰だこの小動物は」

「小動物じゃありません！！柳 真朱です！！祀裏先輩の後輩です！！」

いや祀裏先輩って言うてる時点でお前は僕の後輩だろ。

「かわいい後輩を持ってたんだね。1年生？」

いや僕たちが2年生の時点で後輩は1年生だけだろ。なんなんだ。女はバカ前提なのか？

「サインもらいに来たんです」

「またか、もういい加減にしろ」

「サイン？」

「ああ、僕が埼玉の大学とテニスの対抗試合があつて、そこで僕が優勝してからファンなんだつてよ」
ダブルスだが。

「サインぐらい書いてあげなさいよ」

「いやサインなんて書けねーよ普通」

.....。

「俺書けるぞ」

「私も」

「ええ.....。」

なにそのまるでいつでもかっこいいサインが書けるように練習しているような厨二っぷりは。。。

「じゃあせめてアドレスくださいよ」

「.....まあそれくらいなら」

2033年12月31日11時20分22秒。ある程度かわいい後輩のアドレスを入手した。

「じゃあ、私はこれで」

「ああ。せいぜい通り魔に刺されないように気をつける」

「なんですかそのイヤミなセリフは」

そうして柳は立ち去っていった。

「久々に出たな」

「あ?」

「本当に心配しているときにしか言わない掛け言葉」

「別に心配してるとかそういうんじゃないんだからねっ」

「お前のツンデレも誰も得しねーよ」

今日一番のポケも軽くスルーされてしまったようだ。

? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ? | . - ?

2 0 3 3 . 1 2 . 3 1 . S a t 1 4 : 4 6 : 0 8

僕は泣いていた。この時刻。上を見上げた瞬間、蒼白な表情をして泣いた。叫んだ。なぜって?僕は預言者になってしまったからだ。僕の言った事が本当になってしまったからだ。あの後3人でやって来た街中の巨大モニターに映し出されていたのは。

柳 真朱が通り魔に刺されて死亡した現場だったからだ。

0003・Uメール

2033・12・31・Sat 16:10:45

その後僕らは除夜の鐘を聞きに行くことなく別れ、それぞれがそれぞれの家へ帰っていった。僕と宮瑠美は泣きに泣いた。周りの人が引くぐらい泣いた。紅樹は泣いていなかったが、心なしか誰か一人強くないといけないと思ったのだろう、その涙を強く握ったこぶしの中に押さえ込んでいるようにも見えた。今にも大声で叫びだしそうだった。でも泣く事はなかった。

「...強いなあ...紅樹は...」
pipipipipipi!!!!!!

こんな気分じゃメッセージを見る気もなかった。僕らしくないな。どんなに忙しくても、眠くても、疲れていてもメッセージは一番に見ていたというのに。

しかし僕は25日の事を思い出した。アンnoonユーザーのメッセージだ。僕はこのメッセージを【Uメール】と呼んでいる。Un^{アン}knownとUser^{ユーザー}の“U”を取って【Uメール】だ。

そしてその【Uメール】が今まさに届いたのではないかと僕は予想した。先日クリスマスプレゼントとして自分で自分に買ってあげたスマートフォン画面を開き、内容を確認した。やはり予想通りだった。

『【Unknown】柳 真朱は今日、亜城台大学を出た後表参道の交差点で殺されたか聞きたい』

「くっそ、ナメやがってっつっつっ!!!!!!」
先週買ったばかりのスマートフォンを地面に叩きつけていた。無意識に。反射的に。2010年代のものとは違い、より壊れにくく機能性に優れているそのスマートフォンに外傷はなかった。しかし僕の心情はもう外傷だけでは済まなかった。すると急な嗚咽^{おえつ}に身まわれ、約2時間嘔吐感が止まなかった。

2034.1.7.Sat 23:00:00

『【アンドリユー】さんがログインしました。』

『【アンドリユー】来たぜ………って何だこの人数はっ！

！』

『ルーム8 - :9806名ログイン中』

『【Alfred】よし全員そろったな。これからはサイトの炎上を防ぐため発言は最小限にしてくれ』

1000万人から重要な友人を絞ってもやはりこれだけの人数になつてしまうのか。僕がまとめなければ。

『【Alfred】結論から言う。本物の【Unknown】からメッセージが来た』

『【ab - 阿修羅】ノシ』

『【Alfred】何だ阿修羅』

『【ab - 阿修羅】なぜ本物とわかる』

『【Alfred】僕の名前。そして母が殺された事を知っていた』

『【ターンエー】誰かが成りすましてるんじゃないのか』

『【Alfred】僕の本名を知っているのはアルフレッドだけだ。

』

『【@E】外部から来てないの？』

『【Alfred】このサイトは同じユーザー名が被っていると登録できない』

『【mwmwmwm】で？』

『【Alfred】本題だ。Unknownユーザーの正体と先日起こった通り魔事件の犯人を探してほしい』

こんなの誰も協力してくれないだろうと思っていた。でも結束は力へと変わった。全員が了解の返信をくれたからだ。9806通の了解の返信。涙がこぼれそうだった。良い友を持つものとは言うが良い友が集まればどうなるのだろう。そんな事を考えているだけで心が晴れた。挫ける必要はない。後は進むだけだ。みんなが僕の背中を押してくれる。これが一週間決意を固めた結果だった。ドッキリ

でいうところの【大成功】ってやつだ。そしてたった2週間でその答えは出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202z/>

アンノーン-unknown-

2011年12月22日17時53分発行